

- 1 派遣期日 令和元年6月14日（金）～6月15日（土）
- 2 研修先 学校名（会場名） 筑波大学附属小学校
所在地 東京都文京区大塚3-29-1
<http://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp/>

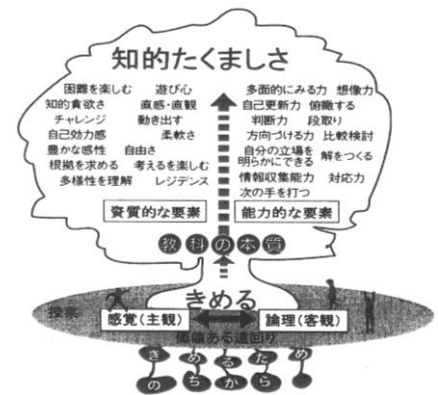
3 研修内容

（1）視察校における研究への取り組み

研究主題： 「きめる」学び<4年次>
～各教科・領域における「きめる」学び～

①「『きめる』学び」について

筑波大学附属小学校では、平成27年度より「『きめる』学び」をテーマに研究を進めている。本研究は、チャレンジする意欲や冒険心が旺盛で、柔軟でしなやかな発想ができ、自分の力で粘り強く納得できる答えを見付けようとする「知的にたくましい子」を育てる授業づくりを目指したものである。本研究の1年次の研究で見えてきた、「『きめる』学び」を通して育みたい「資質的な要素」「能力的な要素」，「『きめる』学び」の中に表れる「感覚と論理の往還」といったものを右のような一本の「ツリーモデル」に表している。今年度は4年計画で進めてきた「『きめる』学び」に関わる研究の最終年として、研究発表会が行われた。研究授業や日々の授業を通して、各教科・領域における「『きめる』学び」の具体的な様相を整理し、以下の4つの要素で分類している。



- きめる①…自分の経験や、これまで身につけてきた知識・技能を生かして「きめる」
きめる②…自分事として「きめる」
きめる③…自分のこだわりをもって「きめる」
きめる④…自分が「きめた」学びを実感する

この4つの要素は、必ずしも順序性を表すものではないとしている。「きめる」「決め直す」プロセスの中で子どもの「知的たくましさ」が育まれること、そして、「きめ直し」には教師の関わり、働きが欠かせないとしている。

②体育科における「『きめる』学び」の授業モデル

体育科では、自分の課題や、自分が重要と考える運動のポイントなどを、根拠をもって「きめる」「きめ直す」過程で、「もっている情報を意識しながら試行錯誤し続けられる」姿、「情報と自分の感覚、結果としての運動パフォーマンス、これらの整合性をとろうとし続ける」姿、「次の課題を見つけようとする」姿などを見せながら、知的なたくましさを獲得していく。そこで、体育科における「『きめる』学び」で育つ力として、以下の7点に整理している。

- ①運動のポイントを理解する力 ②見通す力 ③情報収集力 ④情報を活用する力
⑤知識と技能をつなぐ力 ⑥仲間に進み寄る力 ⑦追求する力

本研究では、これら7つの力が育つ「『きめる』学び」の授業モデルとして5つを示している。○番号は各モデルで育つであろう力を示している。

- | | |
|-----------------------------------|------|
| A 取り組みははじめから「きめる」を取り入れる | ①④⑤ |
| B 学習内容が身についたところで「きめる」を取り入れる | ①②⑥⑦ |
| C 記録を更新するため、勝つためにメンバーを「きめる」「きめ直す」 | ①⑥⑦ |
| D パフォーマンス作品づくり | ①②③⑥ |
| E 単元（学年）をまたいだ「きめる」 | ①④⑤⑦ |

(2) 公開授業（1 学年体育 おりかえし運動 よじのぼり逆立ち）

低学年の体育授業における「『きめる』学び」

「おりかえし運動」は効率よく運動量を確保できるだけでなく、体の総合的な動きを身に付けさせる有効な運動教材である。本授業では、手押し車のお手伝いの人数を子どもが「きめる」場面を設定していた。子どもたちは、「安全に落とさずに手押し車で進むこと」を条件に、ペアで相談したり、仲間の動きを見たりしてお手伝いの人数を決めていた。コースの途中にはマットを置き、折り返し運動の中に前転を入れるなど、さまざまな動きの運動を取り入れていた。また、リレー形式にして楽しく活動をさせていた。

「よじのぼり」はマットに両手を着き、両足で壁をよじ登り逆さの姿勢になる運動である。目線、肘の突っ張り、足首と運動のポイントを明確にして取り組ませていた。ここでは、仲間の運動を見て、お手伝いが必要か必要でないか「きめる」場面と、10秒間にどんな課題に挑戦するかを「きめる」場面を設定していた。お手伝いが必要かどうか仲間が判断する場面では、1年生なので、「お手伝いがしたい」と思う児童が多く、お手伝いされている児童が「お手伝いはいらない」と叫んでいる場面が見られた。1年生には難しい様子であった。どんな課題に挑戦するか「きめる」場面では、より難しい課題に挑戦しようとする姿が一人一人から見てとれた。

(3) 研究協議（5 年生 ハードル走）

研究協議では、公開授業の内容だけではなく、他の単元での「きめる」学びについて具体的な子どもの姿と合わせて紹介された。

5年生のハードル走では、抜き足に関して「きめる」場面を設定した。抜き足は理論的には右の写真のように体の横に畳むのが良いと理解できる。しかし、これだと抜き足の方向に体が捻れる力が生じて、走りにくいと感じる子も出てくる。そこで抜き足をどう動かすのがいいか試行錯誤して「きめる」時間を設定した。

捻れられる力を上手く処理できる子は、体の横で畳むような動きの抜き足に「きめた」。



反対に、これにやりにくさを感じる子は、膝を立てた姿勢で素早く抜く動きに「きめた」のである。

試行錯誤する時間、「きめた」動きを習熟する時間も必要なことから、1回の授業ではその良さを感じにくい。何回かの授業を経て、「きめた」ことが自分に合っていることが多かった。そこで記録が向上したと実感・自覚できたとき、体育の授業の良さ体感することができる。

4 感想

- 授業や研究協議を通して、子どもの学びを質的に高める指導方法の工夫について、数多くの知見を得ることができた。また、新学習指導要領で求められている資質・能力の育成や主体的・対話的で深い学びにつながる具体的なイメージをもつことができた。
- 授業中に子どもたちが主体的に活動している姿が印象的だった。自分で「きめる」場面を設定していることで、自分で「きめた」ことに対して進んで運動に取り組んでいた。
- 今回学んできたことを少しずつ実践して検証していきながら、これからの教育実践に生かしていきたい。